

あとがき

昨年、早稲田大学から「特別研究期間」(サバチカル)をいただいていたこともあって、対談形式の「演劇時評」を半年間務めた。『悲劇喜劇』(早川書房)だ。岸田國士がはじめたこの由緒ある雑誌に素人の私が登場するのはいかにも不似合いだった。軽率な話だが、対談形式で、お相手は文学学術院の小田島恒志さんだからつい引きうけてしまったのだ。小田島さんはイギリス現代劇の翻訳を現場に提供しておられるプロだったから、こちらの無知が際だってしまった。

半年で何とか五〇本ほどは観たが、小田島さんはサバチカルでもないのに年に一五〇本は観るといふ。芝居は残らないから、どれだけ観たかが勝負だ。その上に、小田島さんは現場に足を運ぶともいふ。活字にはならなかった裏話も面白かった。芝居が好きで好きで仕方がない、そんな雰囲気がいとも伝わってきた。こちらは人付き合いがうまくなく、書齋にこもって本を粗製濫造する以外に興味がないという無粋な人間だが、おかげで芝居を観る面白さが少しはわかってきて、その後もつい観るようになった。生まれてはじめて面白い趣味ができたわけで、人生が少し豊かになった気がした。それだけでも恥をかけた甲斐はあった。

いま、漱石がどう読まれてきたのかを同時代評からまとめる本を書いているところだが、同時代評には「演劇時評」のような臨場感がある。漱石は内容どうこうよりも、書き方が「説明的」だと批判され続けている。小説の文体がまだできあがっていなかった時代の雰囲気がい立つように伝わってくる。その後、読み方の方程式を作ったの言うまでもなく小宮豊隆だが、それがいまでも形を変えて再生産され続けている。もちろん、つまらない。漱石の文学にはじめて触れるような喜びと違和感がない。

今回からこの研究誌に石原ゼミの面々が加わることになった。修士論文はどのようなスタイルであっても

いいが、教育学研究科なのだから小説テキストが読めなくては困るだろうと思つて、授業ではあえて研究史の分厚い田山花袋『蒲団』を読んだ。全員ではないが、その成果をずらつと並べてみた。他のゼミ生も含めて、まだ博士課程前期の学生たちである。未熟ではあるかもしれないが、文学テキストを論じた成果をはじめ、活字にする喜びが匂い立つように伝わる論文が少しでも多ければ嬉しい。

(石原千秋)